K-Club Activities No. 005

ワンダーフォーゲル部

自然という「非日常」を楽しむ

本学ワンダーフォーゲル部は、登山やスキーなどを通してキャンパスでは体感できない自然を楽しむことができる部会である。

今年創部60周年を迎える同部では、現在２つの悩みを抱えている。それは「活動内容の認知度が低いこと」と「女子部員が少ないこと」。そこで今回は、主将の黒田秀紀君（史３）に、２つの悩みとその解決に向けた取り組みについて話を聞いた。

合宿で親睦を深める

ワンダーフォーゲル部の主な活動は、登山やスキーなどの野外活動である。毎週水曜日に渋谷キャンパスの部室で合宿の打ち合わせなどを行っている。授業期間中は、土日を利用して関東近辺の山登りやバーベキューを楽しみ、長期休暇中には、日本アルプスの縦走に挑戦するなど、日本各地を旅している。また、冬季には群馬県川場村で毎年スキー合宿を行い、同部所有の山小屋に宿泊、部員同士の親睦を深めている。

部員は４年生10人、３年生６人、２年生12人、１年生11人の計39人で、「合宿が多く、24時間一緒にいるので、仲間の良い面も悪い面も見えてしまう。それを知った上で、相手との距離がより縮まることがある」と黒田さんは話す。

驚いたことに同部では、登山経験者は少なく、大学から始めた人が多いそうだ。部員は、最初の登山で頂上に到達したときの達成感と、雄大な自然を肌で感じることで、登山の楽しさを知るという。

もっと知ってもらいたい

ワンダーフォーゲル部には、340人を超えるOBOGがいて、今もなお、在学生との交流が盛んに行われている。所有する山小屋もOBOGが土地の確保から建設まで行った。今年は、創部60周年記念パーティーが開催される予定で、ますます活気づいている。

このように歴史ある同部であるが、在学生に対する認知度がまだまだ低いと黒田さんは言う。そこで今年は、昨年までより、勧誘活動に力を入れた。勧誘期間には、部員総出でビラを配り、ブースを作り、丁寧に説明をした。また、ホームページやSNSを利用して同部の活動内容や新入生募集、歓迎会の告知を随時更新した。おかげで歓迎会には多くの新入生が集まり、その大半が入部を決めた。

自分たちの活動をもっと知ってもらいたいという部員の気持ちが実を結び、少しずつ認知されているようだ。

女子部員求む！

同部のもう１つの悩みは、女子部員が少ないこと。もちろん男子部員の入部も大歓迎だが、「登山中の部員への声掛けなどの気遣いや合宿の計画づくりでは、女子部員の方が頼りになります。現に４人の幹部のうち、私を除く３人が女子部員です」と黒田さんは話す。

しかし、現在の女子部員数は５人と圧倒的に少ない。毎年、登山を散策程度に考え、合宿中の食事や水回りを気にして、入部をやめる女子学生が多いそうだ。

黒田さんは「まず、山を登ることで四季折々の自然が楽しめることを知ってほしい。少しでも興味が湧いたら、ぜひ入部してほしい」と切実に話していた。

残念ながら今年の新入生勧誘期間には、女子部員の入部はなかった。「女子部員が少ない」という悩みは、継続中だが、認知度が上がりつつある同部の活動に注目したい。

《記事》森《写真》福沢

若木が丘だより Encore

若木が丘の「昼食難民」

若葉の候も過ぎ、季節が夏に移ろうとしている。今年の春は寒さが長引いた印象があるせいか、皆春の風と陽の光を求めているのかもしれない。昼時の渋谷キャンパスでは、初夏の風に吹かれながら、校舎前のベンチや正門近くの石段に座ってお昼を食べる学生たちをよく見かける。いや、そういう学生で溢れかえっている。所狭しと居並んで楽しそうに、しかし幾分窮屈そうに、思い思いにお昼を食べている。そのちょっとみっともなくもくつろいだ様子に、就職難民ならぬ「昼食難民」という名が思い浮かんだ。

あるいはこの春の混雑ぶりは、体育館跡地の新設工事が原因かもしれない。体育館前の階段という広いランチスポットが失われた分、昼食時の人口密度が上がり、残された快適なランチスポットは取り合いとなり、結果難民が発生しているのかもしれない。

ここでふと、自分が学生であったときの昼食はどのように食べていたのかが気になり、薄くなりかけた記憶をたどってみた。たまプラーザキャンパスの日当りのいい芝生に腰を下ろしてコストパフォーマンス抜群の「ブールパン」をぱくついたり。氷川神社下の公園のベンチでコンビニのおにぎりを食べたり。生協でお湯を入れたカップラーメンを今は無き大学院棟前の階段に座ってかきこんだり。なんだ、自分も立派にみっともなくもくつろいだ「昼食難民」だったんじゃないか。そういえば盛夏を迎えて野外での昼食がつらくなってくる頃には、新たに友人もでき、空き教室や部室、ラウンジなど、空いている場所を見つけるのが上手になって、だんだんとみな「昼の居場所」を確保するようになっていったと思う。

「昼食難民」は春限定の風景、新学期の風物詩なのかもしれない。

飯倉義之（学生部委員・文学部助教）